

以上、 T_4 -KIT は B. F. 分離の操作の異なるものが現在、5 種類あり、いずれも使用血清量は少なく、操作は簡便であり、CPBA とよく相関する、皆すぐれた KIT である。

末広 (マイルズ三共) によれば、setalute の場合は T_4 の TBG よりの分離が完全であるため高値を示すことがあるとのことである。

14. Reverse T_3 の測定とその臨床的意義

末広 牧子 丹野 宗彦
山田 英夫 星 賢二
飯尾 正宏
(都立養育院・核放部)

Hypolab (Italy) 社製の Reverse T_3 Radioimmunoassay 用 kit を用いて、正常者および甲状腺疾患者を対象に、血中 rT_3 濃度を測定し、その臨床的意義を検討した。

結果と考察 i) rT_3 値は T_4 値よりも、 T_3 値と明らかな相関を持ち、 rT_3 が高値 (0.5 ng/ml 以上) を示す検体はほとんどすべて、その T_3 値が 1.0 ng/ml 以下であった。この場合、 T_4 値は、必ずしも異常値は示さない。ii) rT_3 値が高値を示す患者には、70 歳以上の老人で、過去に甲状腺疾患を持たなかった“正常者”が多い。老人正常者と 50 歳以下の比較的若い正常者の rT_3/T_4 の平均は、それぞれ、 0.0102 ± 0.0045 , 0.0042 ± 0.0005 、これに対して、 T_3/T_4 はそれぞれ 0.0074 ± 0.0022 , 0.0188 ± 0.0021 であり、老人の rT_3/T_4 は若年者より約 2.4 倍高く、 T_3/T_4 は約 2.5 倍低い。また、 rT_3/T_3 では、若年正常者には個体差があまりなく、0.2 ~ 0.3 を示したが、加齢とともに上昇する傾向がみられ、老人のなかには 2.3 ~ 3.0 の高値を示すものもあった。これらは、 $T_4 \rightarrow T_3$, $T_4 \rightarrow rT_3$ 変換の問題として考えると、大変興味深い。iii) 甲状腺疾患患者の場合は、Hyper, Hypo とともに未治療の段階では、 rT_3 値は 0.5 ng/ml 以下の正常範囲にあるが、 rT_3/T_4 の平均は正常者の 0.0042 に対して Hyper 0.0022, Hypo 0.0081, rT_3/T_3 はそれぞれ 0.23, 0.082, 0.74 であった。

伴 (昭和大・内分泌) よりを投与した場合の rT_3 増加について質問があったが、この絶対値も増加している。

15. ^{201}Tl -chloride による甲状腺シンチグラム 30 例の検討

牧 正子 木村 礼子
日下部きよ子 山崎統四郎
(東京女子医大・放)

過去 4 ヶ月間に ^{201}Tl -chloride によるシンチグラフィを行なった甲状腺疾患 36 症例について検討した。

症例の内訳は甲状腺癌 14 例 (原発巣を有するもの 3 例、転移巣のみのもの 11 例)、結節性甲状腺腫 5 例、慢性甲状腺炎 6 例、甲状腺機能亢進症 5 例、腺腫様甲状腺腫および亜急性の甲状腺炎各 1 例である。

検査方法は ^{201}Tl -chloride 1.6~2.0 mCi を静注し、5 分後より 1 時間にかけて全身および局所のシンチグラムを得た。

結果: 甲状腺癌 14 例中 11 例で腫瘍部が陽性描出されたが、陰性例は ^{131}I 治療後の症例で他検査でも腫瘍残存を指摘し得なかった 2 例と、胸部 X 線写真上は異常を示さず、 ^{131}I 投与によってはじめて肺転移を証明した 1 例であった。組織像との関連では分化癌での集積が良好である反面、未分化癌での集積は劣った。結節性甲状腺腫は 5 例中 2 例で結節への集積をみたが、これらは濾胞腺腫であった。他の 3 例の陰性例は良性腺腫と考えられたため手術がなされなかった。慢性甲状腺炎 6 例は全例で著名な陽性像を示した。甲状腺機能亢進症では 5 例中 2 例で陽性像を得たが、これら 2 例はいずれも慢性甲状腺炎の合併を否定し得ない症例であった。

以上のごとく ^{201}Tl -chloride は各種甲状腺疾患でそれぞれ特徴的態度を示したが、特に甲状腺癌では、 ^{67}Ga -citrate が診断上あまり有効でない分化癌で、その有用性が認められた。